



第93回

将棋の通算1000勝

※2025年4月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

1 / 3

相次ぐ快挙に、将棋界は喜びに包まれた。森内俊之九段と森下卓九段が2月と3月、相次いで通算1000勝を達成した。これまでは大山康晴十五世名人、加藤一二三九段をはじめ10人しかいなかった。同じ17歳で棋士になった両者の快挙までの歩みを振り返った。

森内九段は1987年にプロ入り。名人戦12回を筆頭にタイトル戦に25回登場し、名人8期などタイトル獲得12期の輝かしい成績を残している。

998勝で迎えた2月20日のNHK杯テレビ将棋トーナメント予選は、1回戦、準決勝、決勝が1日のうちに一气に行われ、3連勝すれば本戦に進む。1000勝まであと2勝とは知っていたが「と

りあえず1局目の対局を頑張ろうという感じで、1000勝に対する意識はなかった」。2局目で苦戦を強いられたが何とか制し、大台に到達。「対局に集中しよう」と気持ちを切らさず、3局目も勝って予選突破を決めた。

「達成した先輩方は偉大な実績を残してきた人ばかりなので大変栄誉なこと。ただ、これまでの積み重ねの結果なのでどこかで達成できるだろうと思っていた。無事達成できて多くの方に喜んでもらえてうれしかった」と、10人目の1000勝達成者となったことを冷静に喜んだ。

印象的だった対局に挙げたのは、同学年の羽生善治十九世名人（九段）から初めてタイトルを奪取し

た2003年の竜王戦七番勝負。

羽生九段とは小学生の時から奨励会、棋士とずっと切磋琢磨せつさくましてきたが「常に先を行く目標だった」。

タイトル初挑戦となった96年の名人戦、翌年の棋王戦で羽生九段に挑戦したが一方的な内容で敗退。02年に念願だった名人を丸山忠久九段から獲得したものの翌年に羽生九段にストレート負けして奪われた。

だが、名人にふさわしい将棋を打とうという重圧から解放され、かえってのびのび指せるようになり、成績が回復。名人失冠から半年後の竜王戦七番勝負で羽生九段に挑戦し、ストレートで破る改心の結果を残した。「それまで勝てなかった相手に4連勝できると思わなかったのでびっくりした。出来過ぎのシリーズだった」。その勢いで、王将、名人も羽生九段から奪取して3冠達成につながった。17年に順位戦を指さない「フリークラス」への転出を決断。竜王戦ランキング戦では一番上の1組

に所属し、その強さは健在だ。

森下九段は83年にプロ入り。王座戦などタイトルに6回挑戦したが、不思議とあと一歩届かず「無冠の帝王」の異名を取る。「棋士になった頃は1000勝は大山先生しか達成していなかった。タイトル4期の桐山清澄九段でもあと4勝届かず、大棋士でも1000勝は遠い」と考えていたという。

2月25日にあと1勝に迫ったが、時間切れ負けと逆転負けで足踏みし、3月11日のC級2組順位戦で若手に勝つてようやく1000勝に手が届いた。

節目の対局は、持ち駒の歩を打って玉が詰む「打ち歩詰め」の反則以外では自玉が詰まないという珍しい形で白星を挙げた。「詰まないと油断していると以外な手順で詰むと教える『打ち歩に詰みあり』という言葉を頭の中で繰り返し、何度も何度も盤上を確認した」。残り時間19分のうち5分を割いて慎重に考え、打ち歩詰めのに進める■9六歩を指した瞬間、「36

年ぶりに手が震える感じを味わった」と苦笑した。

その「36年前」というのは、順位戦で一番下のC級2組からやつと昇級を決めた89年3月の加瀬純一七段のこと。開幕から8連勝後の9戦目で1敗を喫し、「今期もダメか」と思い悩んで迎えた最終局。「上がれなかったらどうしよう」と恐怖感が襲われながら対局し、勝利が見えて昇級を確信した時に手が震えたという。

「初めて順位戦で上に上がることでできて、恐怖感がなくなって上だけ見られるようになった」という、その後の活躍につながる大きな1勝になった。

「950勝から先がとてつもない上り坂で、1勝が20代の時の15勝くらい大変。75度くらいの急坂を上り切ってやれやれ、という以外に言葉がない」とおどけながら40年以上に及ぶ棋士生活に思いをはせた。

現在は常務理事として、日本将棋連盟の運営にも携わる。100

0勝を達成して肩の荷が下りた森内九段。棋士として、理事としての奮闘が続く。